

第90号

ほほえみ

03 02 09

暦の上では春。古今集にこんな歌があります。

「君がため 春の野に出でて 若菜つむ

わが衣手に 雪は降りつつ」 光孝天皇

あなたの長寿のために春の野に出て若菜を摘んでいる私の袖に、雪が次から次へと降りかかる。

天皇が即位する前に大切な人のことを思い春の若菜を摘んで贈ったときに添えた歌です。大切な人の健康を思う気持ちは昔も今も、誰でも変わりません。

<第92回 ほほえみの会>

最近入院された方2組と堀越先生含め全部で12人が集まりました。

▽ 2歳9ヶ月の女の子 神経芽細胞腫 1月末に入院 正月に頭にこぶができ、整形外科で診てもらって異常ないと言われたが、日に日に大きくなり改めて小児科で診てもらい病気が分かる。最初の抗ガン剤治療でこぶは小さくなり、他に転移している腫瘍も小さくなっている。同じ病気を克服して元気である人の姿を見るのは励みになる。

▽ 3歳6ヶ月の女の子 急性リンパ性白血病 12月頃から首が痛いとかお腹が痛いと言っていたが、弟が生まれたこともあり甘えているのだろうと思っていた。もっと早く病気が分かれば本人も痛い思いもせず親にしかられることもなかったのにと後悔。また近くの病院でかぜと言われるのと同様に軽く白血病ですと言われ、信じられない気持ちだった。県立短大の金城先生によると、昔は白血病の病気を親に伝えるには、祖父母にも来てもらい医師も覚悟を持って話をした。今はそれだけ病気が一般的になっていて、治る病気になっている証拠だろう。

▽ 9歳の女の子 急性リンパ性白血病 一度寛解を迎えたがハイリスクとなり再入院 家では元気な子だが病院ではおとなしい。医師や看護婦さんが声をかけても反応が悪い。頭が痛いというのも本当に痛いのか、気持ちなのか分からない。この不安に対しては、参加者からよくあるとの意見が出ました。結局は本人の性格であり、個性だろう。だが、慣れれば変わるのではないかとということでした。

▽ 7歳の女の子 リンパ性白血病を3歳で発病し、去年9月にようやくの治療が終了し元気でいたが・・・再発。 落胆。 幸い骨髄バンクにHLAの合う人が見つかり、骨髄移植をすることになり既に前処置に入っている。 骨髄移植では合併症も心配。 心配は尽きないが心配のしすぎはよくない。親も付き添っていて気分転換が必要。という体験者からの意見がありました。

また入院中には、親は不安で医師や看護婦の顔色を窺うことが多いという話題もでました。

出合ったときに笑顔でいてくれると、それだけで安心。

医師の「ちょっといいですか」は何か悪いことではないかと心配。

看護婦さんが、廊下やトイレで出合ったときに、心配して声をかけてくれるだけで気分が楽になる。中には、勤務が終わったあとに話を聞いてくれた人もいて本当にありがたかった。

病室の前で医師と看護婦が話していると、自分のことではないかと不安になる。きっと全く関係ない話をしているのだろうが、病室の前での立ち話はやめてほしい。

▽ 2年生 退院して地元の小学校に戻ろうとしたら、インフルエンザが大流行で行けない。学校の先生に「小児ガンの子どもの学校生活を支えるために」というパンフレットを渡した。教師は受け入れる気持ちはあるが、どうしていいか分からないと言っていた。

先月話題となった「がんの子供を守る会」で出している冊子「がんの子どもの教育支援に関するガイドライン」を取り寄せました。ご希望の方は池田までご連絡を。お送りします。

今後、小学校にこうしたガイドラインを配布するなど教師の理解を深めるための運動をしたい。お知恵を。

▽ 建設中の子ども病院北館には、3月中旬に病棟の引っ越しをする。 B1は5階に入り、見晴らしがよくなるということです。

次回は 3月9日(日) 11時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一 TEL054-247-9560

E-mailアドレス

klikeda@mx1.s-cnet.ne.jp

ホームページ

<http://homepage3.nifty.com/hohoemi/>